

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特別増刊号 Vol.2

2015 SANSEIDO

特集 

さまざまな課題に対応するために

平成 28 年度改訂版 *NEW CROWN* の効果的な使い方②



この資料は、社団法人教科書協会「教科書宣伝行動基準」に則って作成しております。

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特別増刊号 Vol. 2

TEACHING ENGLISH NOW 特別増刊号 Vol. 1, 2 は、新しい *NEW CROWN* の内容とその指導例をご紹介します。

(本誌では平成 24 年度版を *24NC*、平成 28 年度版を *28NC* と略記しています。また、各学年の教科書は、*Book 1*、*Book 2*、*Book 3* と表記しています。)

CONTENTS

巻頭エッセイ

01 *New Crown*: past, present and future Thomas Hardy

特集 さまざまな課題に対応するために

02 CAN-DO リストの活用方法 根岸雅史

04 習得から活用へ —1 Lesson の授業づくり 重松 靖

06 GET のパートの指導 榎葉みつ子
—文法、語彙、本文、言語活動をどうつなげるか

08 アクティブ・ラーニングで 4 技能を育てる 山本崇雄
—USE Read をジグソー法で読み進める

10 中学校入門期における文字指導 吉田晴世

12 授業の中に時間を作るには 和田朋子
—明確な目的を持った「断捨利」をしよう

14 発問を活用して授業に生徒を引き込もう 田中武夫

16 妥当性を意識したテスト作りにおける留意点 佐藤臨太郎

18 学びたいことを探し、選び取っていく学習 亘理陽一
—自律的学習への第一歩

20 定着させるための繰り返し学習 三野宮春子

22 二極化に対応したい NEW CROWN 編集委員会

24 英語教科書 —異質性との出会いの場 北川達夫

表 3 『NEW CROWN デジタルテキスト』 デジタル教材編集室
活用のポイントと平成 28 年度版について



表紙写真について

Nepta in the Samba Carnival

2014 年のサッカー W 杯に続き、2016 年にオリンピック・パラリンピックが開催される南米の大国、ブラジル。地球儀で見ると、ブラジルは日本の反対側に位置する遠い国ですが、1895 年の外交関係樹立以降、日本とブラジルは友好的な関係を築いています。

「日ブラジル外交樹立 120 周年」を迎える今年、サンパウロで行われたサンバカーニバルに、外国の山車としては初めて、青森県五所川原市の「たちねぶた（立佞武多）」が出場しました。東日本大震災後のブラジルからの大きな支援に対する感謝の気持ちと、復興への祈りが込められた、高さ 15 メートルの「たちねぶた」が熱気あふれる会場に登場すると、大きな歓声と拍手が沸き起こりました。(編集部)



写真：© 仁尾帯刀
(写真提供：国際交流促進協議会)

【題材紹介】28NC Book 3

Lesson 5 ではブラジルについて扱っています。



巻 頭 エ ッ セ イ

New Crown: past, present and future

Thomas Hardy (Keio University)

New Crown's past has been remarkable for the depth of its thinking, the present is admired for the quality with which it brings these thoughts and ideals to life, and the future can hope to rise to challenges of the 21st century Japan by building on its strengths.

As I understand it, *New Crown* was reinvigorated some 30 years ago when a group of writers and editors, led by Professor Morizumi, and Mr Minemura of Sanseido recognized an unfilled niche in the market for junior high school English textbooks – books that would recognize that the students were young adults, with interests and activities appropriate to their age; that students needed books that provided intellectual challenges, as well as linguistic growth; that language could best be taught through lessons and activities that are communicative; that issues of social awareness and justice were critical to the intellectual and moral growth of students; and that students would rise to meet challenges to think and to learn to think for themselves.

I observed these principles in action at my very first *New Crown* engagement. I was called in to a meeting, asked to read a passage on a Japanese female mountain climber, and then told, “Some people on the writing team think this is sexist. We don’t think so. What do you think?” I thought it was.

I laid out the reasons. As the editorial staff and writers engaged in agitated discussion, I went to the whiteboard and started outlining ways to fix it. The writing team and editorial staff took my impertinent

rewriting in good humor and gradually I became a member of the *New Crown* writing team.

The up-coming edition of *New Crown* fully shares in the commitments I learned early on. There are lessons with a focus on the natural environment, be it animals or living and acting responsibility out-of-doors. Some lessons include components dealing with historical matters, those of Japan, other countries, and the interactions of Japan and other countries. Numerous lessons touch on aspects of major social issues, including the handicapped, the elderly, race and ethnicity in a multi-cultural and inter-cultural world, awareness of issues facing developing countries, and war and peace.

The point is not just that these lessons are in the textbooks. Rather, these issues are included to further the general goals of *New Crown*: to provide material that helps students learn English while at the same time increasing their knowledge of broader worlds, in Japan and beyond; developing their intellectual and critical thinking skills; and challenging them to study and think for themselves.

In future editions, just as in previous and current editions, the writers and editors of *New Crown* will have to adjust to prevailing educational, social, and political climates. It is, admittedly, a difficult time for textbooks working from a peace, justice, and critical thinking perspective. Nevertheless, the writers and publishers of *New Crown* will, I trust, continue their commitment to use the best teaching practices, social justice, and human values.

特集 さまざまな課題に対応するために

CAN-DOリストの活用法

根岸雅史 (東京外国語大学)



「CAN-DO リスト」とは

平成 28 年度版 *NEW CROWN* (以下 28*NC*) では、巻末に What Can I Do? という「CAN-DO リスト」を扱ったセクションがあります。ここでは、その CAN-DO リストのページの説明をします。

2011 年 6 月に発表された「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」の中で、「中・高等学校では、各学校が、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を『CAN-DO リスト』の形で具体的に設定すること」という提言がなされています。

CAN-DO リストとは、「ことばを使ってできる行動 (actions)」を記したもの (CAN-DO ディスクリプタ (descriptor)) をリスト化したものです。CAN-DO リストには、言語を用いた結果、「どんな行動ができるか」が示されています。

世の中には、CEFR (Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment) などさまざまな CAN-DO リストがあります。しかし、これら既存の CAN-DO リストは特定の授業や教科書に対応するものではないため、実際に活用可能な CAN-DO リストを作るには、生徒の実態や教科書などを考慮しながら、長期的および中期的な到達目標を CAN-DO リストの形式で設定するという作業が必要です。

ただし英語の教科書は、基本的には「文法中心のシラバス」に基づいており、「新出文法事項の理解および活用」といった目標は CAN-DO リストの意図とは異なることに留意する必要があります。CAN-DO リストに書かれた「行動」とは、「学習指導要領」でいうところの「言語の働き」(例：苦情を言う、約

束する、招待する、など) を、ある目的の達成のために、いくつか組み合わせて遂行することと考えてよいでしょう。

28*NC* の CAN-DO リストとは

28*NC* では、教科書に対応した、それぞれの学年終了時の学習到達目標を CAN-DO リストの形で示しています。では、28*NC* の CAN-DO リストが、どのように作られているか見てみましょう。

技能は、大きく Speaking/Writing/Listening/Reading の 4 つから成ります。それぞれの構成は次の通りです。

Speaking は、「発表」と「会話」から成っています。「発表」は、スピーチやプレゼンテーションのように、話し手が一定の時間、1 人で話し続ける活動です。これに対して「会話」は、比較的短い発話のターンを頻繁にやりとりする活動です。「発表」と「会話」、どちらも同じような感じがするかもしれませんが、「発表」は、話し手が 1 人で組み立てていくのに対して、「会話」は、相手との共同作業です。また、「発表」は、あらかじめ準備をしたり、メモや原稿を見たりしながら行いますが、「会話」は基本的に即興で、「発表」のような準備はできません。その場で、話すことを考えて、ことばにしなければなりません。実は、Writing も同様な分類が可能ですが (例えば、「記事を書く」などは「発表」、「メール」や「チャット」などは「やりとり」のように)、28*NC* ではこうした区別はしていません。

Listening と Reading といった、いわゆる「受容技能」は、「要点理解」と「概要理解」という 2 つの柱から成り立っています。「要点」と「概要」は、学習指導要領の文言でもありますが、十分な理解を得

られていないかもしれません。「要点」は、「点」ですから、相手の伝えたいポイントやこちらの必要なポイントを手に入れる活動となります。それに対して「概要」は、全体としての理解が必要なものです。物語やニュースでは、登場人物や事件の場所といったポイントだけがわかって、話の全体像はわかりません。こちらは、話のあらすじや 5W1H のようなものが関わってきます。

それぞれの CAN-DO ディスクリプタは、どこからともなくやってきたものではありません。各学年の言語活動 (つまり、USE の活動) と結びついています。たとえば、3 年の Speaking の最初の「発表」は、「行きたい場所と、そこでしたいことについて、メモを見ながら、発表することができる」となっていますが、これは Lesson 5 の USE Speak と結びついています。ここでは、「行きたい場所についてスピーチをする」という言語活動を行っています。ただし、こうしたスピーチ活動を行っただけで、このようなタスクが完璧にできるようになるわけではないので、補助的な「条件」を入れて、難易度を少し下げています。ここで言えば、「メモを見ながら」ですし、他で言えば、「資料を参照しながら」や「資料を見せながら」などの条件が入っています。

28*NC* の CAN-DO リストをどう使うか

① 生徒が使う場合

この CAN-DO リストは、基本的に年度の終わりに 1 年間で振り返って使うことを想定していますが、それだけでなく、年度の始まりに「英語でどんなことができるようになるためにこれから学んでいくのか」を伝えることもできます。

1 年の振り返りのためには、生徒にはそれぞれの CAN-DO ディスクリプタを読ませて、判断をさせます。そのうえで、ページの下にある例のように、自信に応じて□をすべて塗りつぶしたり、半分塗りつぶしたり、空欄のままにしたりします。生徒は一覧表の塗りつぶした□を見て、達成感を持つことができるでしょうし、そこから、実際の場面で、もっと英語を使ってみようという意欲につなげることができるかもしれません。自信のない項目は、該当するレッスンに戻って、復習させるといいでしょう。

② 教師が使う場合

この CAN-DO リストは、教師も利用することができます。この教科書を使って 1 年間指導して、生徒にどのような力をつけるのかを、年度当初にイメージし、年度途中には確認をし、年度終わりには振り返るという具合です。

これらの学習到達目標の達成のために、対応する教科書のタスクに取り組むのはもちろんですが、それだけでは十分ではありません。たとえば、スピーチの形式を覚えても、その中身を語れる英語力がなければスピーチができるようにはなりません。形式などの「周辺の知識」と、狭い意味の英語力という「核となる知識」とを分けて考える必要があるでしょう。後者は、言語活動を一度やったからといってできるようになるというものではなく、継続的なトレーニングが必要です。そのためには、毎 Lesson の GET Drill / Practice を確実に行う必要があります。また、生徒の自己評価の妥当性についても、実際にパフォーマンス・テストを実施するなどして、確認していかなければなりません。

さらに、冒頭に書いたように、「中・高等学校では、各学校が、学習指導要領に基づき、生徒に求められる英語力を達成するための学習到達目標を『CAN-DO リスト』の形で具体的に設定すること」が求められていますから、この CAN-DO リストを参考に各学校の CAN-DO リストを作ることができるでしょう。もちろん、ここにある CAN-DO ディスクリプタは想定される代表例です。ですから、この CAN-DO リストを参考にしながら、自身の指導計画をもとに、より相応しい CAN-DO リストを作成することが望まれます。

最後に、CAN-DO リストといわれる単元の評価規準との違いが問題になります。CAN-DO リストは、卒業時・学年終了時などの長期的な学習到達目標を書いたものですが、評価規準は單元ごとの実際の学習活動を踏まえた具体的なものです。評価規準に基づいた指導と評価を積み重ねて、CAN-DO リストの形での学習到達目標を達成することになります。

【参考文献】
文部科学省、「2011 年 6 月 30 日『国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策』」http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/___icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf

特集 さまざまな課題に対応するために

習得から活用へ ―1 Lessonの授業づくり

重松 靖 (国分寺市立第二中学校)



学力の3要素

学校教育法第30条第2項には、「(前略)生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに特に意を用いなければならない」とある。その後告示された学習指導要領でも学力の重要な要素として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲、の3つを示した。

外国語の学びのプロセス

NEW CROWN(以下NC)は平成24年度版以降、この学力の3要素とPPPという指導手順を意識して単元を構成してきた。PPPとは、Presentation(提示)、Practice(練習)、Production(表現)、つまり新しい表現に出会い(Presentation)、その意味や使い方に習熟し(Practice)、自分の考えや感想、自分自身のことを表現する(Production)、という学びのプロセスである。

28NCにおいても、1年入門期を除き、どの学年のレッスンも原則的に次の5種類のページから成る。すなわち、①とびら、②GET、③USE Read、④USE Speak / USE Write、⑤まとめ、である。学びの見通しを立て、学習に対する意欲を喚起する「とびら」(Presentation)、基礎的・基本的な知識・技能を習得する「GET」(Presentation, Practice)、知識・技能を活用して課題を解決する「USE」(Practice, Production)、学習したことを振り返り、基本的な知識・技能を確実にし、さらに学び続けよ

うという意欲を持たせる「まとめ」という構成である。なお、「聞くこと」はLet's Listenとして独立させ、学年に6ヵ所ずつ配置している。

見通しを持たせ、意欲を喚起する「とびら」

Book 1 Lesson 9を例に、実際の指導を考えてみたい。

「とびら」はそのレッスンの入り口、導入部である。映画でいえば「予告編」、単行本であれば「帯」の役割を果たす。すなわち、概要を紹介し、さらに観てみたい、読んでみたいという意欲を喚起させるものでなければならない。

Lesson 9のとびらのページでは、まず美しい4枚の写真に目を奪われる。写真下には①What do you see in these pictures?という問いがあり、生徒は一枚一枚の写真をじっくり観察することになる。「桜」「紅葉」「夏祭り」「雪まつり」、LessonタイトルはFour Seasons、「ははあ、このレッスンでは日本の四季を取り上げるんだな」と生徒は予想する。さらにWhich season do you like?という質問②によって、その題材を自分のものとしてとらえるようになる。

ページ下の「この課で学ぶこと」には、この課で具体的に学ぶ内容が書かれており、生徒が目指すべきゴールが明確に示される。現在、学習到達目標を「～することができる」というCAN-DOリストの形で具体的に設定することが求められている。この課の場合、学力の3要素と観点別評価と照らし合わせると、単元目標は①「学校生活についての記事を書く」(活用、外国語表現の能力)、②「一般動詞の過去形を理解する」(基礎的な知識、言語に対する知識・理解)、③「間違いを恐れず学校生活についての英文を書く」(学習意欲、コミュニケーションへの関心・意欲・態度)となろう。

基礎的・基本的な知識・技能を定着させるGET

GETは、基礎的・基本的な知識・技能習得のページである。POINTに示される基本文は、これまで学習した現在時制とポイントとなる過去時制を対比させ、違いが明確になるようにしている。Drillは基本文の定着を目的とした機械的なドリル(Mechanical Drill)である。「聞いて理解する」(Listen & Choose)→「聞いて、繰り返す」(Listen / Repeat)→「絵を見て英文を話す」(Say)→「絵を見て英文を書く」(Write)、のようにsmall stepsを意識しながら、確実に身につくようにしている。

POINTで学習した基本文を用いて、「聞くこと」「話すこと」「書くこと」の基本的な技能を身につけるのが右ページのPracticeである。Mechanical Drillに続くMeaningful Drill, Communicative Drillにあたる。ここでも生徒に負担がかからないよう、音声から文字、理解から表現、というプロセスを重視しListen, Speak, Writeの順としている。さらに、「健が週末にしたことに○をつけよう」(Listen)、「先週末にしたことについて、ヒントを参考にして、ペアで話してみよう」(Speak)、「自分がしたことと、相手が話したことを書いてみよう」(Write)、のようにできるだけ一貫したテーマで活動が連続し、しかも自分自身のことを表現できるようにしている。

GETの本文は、レッスン全体のテーマに関連した比較的短い英文を読むことを通して、ポイントとなる文法事項を定着させる。Lesson 9の場合、GET Part 1ではエマが日本で旅したこと、Part 2ではエマが秋田を訪れ、かまくらを体験したことを、ポイントとなる過去時制を用いてブログという形で紹介している。英文の内容を理解した後は、暗唱できるまで音読してほしい。

習得した知識・技能を活用するUSE

基礎的・基本的な知識・技能を活用し、自在に使えるようにするのがUSEである。28NCでは全レッスンにUSE Readと題材や言語材料に応じてUSE WriteまたはUSE Speakを配置している。

USE Readは、1文ずつ日本語に直す訳読式ではなく、何度も繰り返し読みながら内容を理解して

いく。外国語学習のためのテキストではなく、Reading for fun / Reading for informationという日常生活における本来の「読み」にできるだけ近づけたいと考えている。

28NCでは、概要から細部の理解へというステップを踏むため、「内容のおおすじをつかむ」1st Reading、「細かい内容をおさえる」2nd Reading、「内容をふり返る」3rd Readingという3つの質問を用意している。生徒はこれらの問いに答えながら、繰り返し繰り返し読み、内容を理解していく。左ページにはTips for Readingという読むためのヒントや、Notesとして内容を理解するために必要となる予備知識が書かれている。Lesson 9では「タイトルと写真から内容を予測しながら読んでみよう」というヒントと、五山送り火についての説明がなされている。さらに、新出語彙については生徒の負担を軽減するために日本語の意味が書かれている。こうしたステップやヒントを使いながら生徒に「読めた!」「わかった!」「できた!」という達成感を味わわせたい。訳読式の指導では味わうことができない満足感である。

このレッスンの学習到達目標の1つである「学校生活についての記事を書く」のがUSE Writeである。まずモデルとなる健の学校紹介記事ができ上がるまでの手順、すなわち、Step 1「できごとを選ぶ」、Step 2「日本語でメモを作る」、Step 3「日本語のメモから、Opening(できごと)、Body(どこで、何をした)、Closing(感想・まとめ)に分け、英語でメモを作る」、Step 4「英語のメモをもとに、文章を書き、タイトルと署名をつける」、という一連のプロセスを学ぶ。その後、右ページを使って、同じプロセスで各自が学校生活を紹介する記事を書く。

振り返り、整理する「まとめ」

最後にこの課で扱った文法事項や音のルールを振り返り、身につけたことを確認するまとめがある。さまざまな言語活動を通して身につけたことを文法というルールに当てはめ、理解をより強固なものにする。授業の最後に扱ってもよいし、家庭学習や自学自習のために活用してもよい。

特集 さまざまな課題に対応するために

GETのパートの指導

—文法、語彙、本文、言語活動をどうつなげるか

梶 葉みつ子 (広島大学)



NEW CROWN の GET と USE

1つの課が GET と USE のパートで構成され、文法を導入し練習をさせる GET から、文法を活用させる USE へと発展していることが、NC の大きな特長である。GET のパートでは、文法の意味と形式だけではなく、どのような場面でどういう働きのために文法を使うのかも理解できるように、本文と言語活動の内容が工夫されている。また、ヒントとなる語彙が示されているため、文法を使う練習をさせやすい。これらの NC の特長や工夫を生かした GET のパートの指導例を紹介する。

指導例 (Bk1 L8 School Life in the USA)

1. GET Part 1 の目標と授業構成

本課の内容は、アメリカの学校生活についての写真や絵を用いた説明であり、新出文法として現在進行形が使われている。その内容や文法を活用して、本課の目標の1つを、「身近なものについて、写真や絵を用いて簡単に説明する」と設定できる。

GET Part 1 の目標は、本課の目標と関連させて、「現在進行形を用いて写真や絵の人物の動きを説明する」とする。授業構成の各段階で使用する教科書のパーツと、ねらい及び学習内容は次のようになる。

(1) 本文の場面と文法の導入

人の動きを説明する場面で使うことを示すために現在進行形を用いて本文の内容を導入する。

(2) 基本文による文法の説明と Drill による練習

現在進行形の意味と形式を知らせ、機械的な練習をさせて、形式の定着を図る。

(3) Practice と Word Bank による練習

現在進行形を場面と結びつけて使う練習を、理

解から表現へと段階的に行わせる。

- (4) 語彙の発音練習と本文の内容理解・音読練習
語彙の発音練習の後、本文の読解、音読練習をさせ、内容を再話させる最後の活動につなげる。
- (5) 本文中の写真や絵の説明
GET Part 1 のゴールとして、本文中の写真や絵の人物の動きを説明させる。

2. GET Part 1 の指導過程

(1) 本文の場面と文法の導入

Words

- student(s)
- language
- read
- speech
- make
- poster
- group
- in a group

White ホワイト(人の姓)
language arts
言語芸術(科目の名前)

These are pictures of Ms White's classroom. The students are studying language arts. Look. This girl is reading. This boy is practicing a speech. These students are making a poster in a group.

What does Ms White teach?

- ① ポールが話している様子や授業風景を表す絵を見せて、本課の場面や、絵の中の人物の動きなどを説明する。

T: Paul is talking about his friends' school life in the USA. Look at these pictures.
This is Ms White. She is teaching. These students are studying. What is this girl doing?

S: Read a book?

T: Yes, she is reading a book. (以下略)

このような教師と生徒による簡単なやり取りによって、場面を理解させる。

- ② 本文の音声を聞かせ、写真は何の授業か等の発問によって、あらましを理解させる。

(2) 基本文による文法の説明と Drill による練習

現在進行形

●肯定文
[～しています]

Tom studies math every day.
Tom is studying math now.

Drill

1 Listen & Choose 2 Listen / Repeat / Say 3 Write

Tom Miki Koji Tom and Amy

- ① 基本文を用いて文法の説明をする。本課の目標との関連や使用場面についての説明も加える。
- ② Drill を用いて、次の順に練習をさせる。
- a) 1 Listen & Choose (音声を聞かせ、その英文が表している絵を選ばせる)
- b) 2 Listen / Repeat / Say (絵の人物の動きを表す英文を音声で聞かせたり、繰り返して言わせたり、絵を見て言わせたりする)
- c) 3 Write (絵を見て英文を正しく書かせる)

(3) Practice による練習

Practice

1 Listen 丘先生が写真に写っている人について話します。話を聞いて、だれのことを説明しているのか、絵の中の()に番号を書き入れよう。

2 Speak この教科書の中から絵を1つ選び、ペアの相手に説明しよう。聞いた人は、どのページの絵か、当てよう。(Word Bank)

A: Emma is watching birds. Where's this picture in the textbook?
B: It's on page 52.

3 Write 2で話した内容をまとめて書いてみよう。

Emma is watching birds on page 52.

Word Bank

いろいろな動作

talk with friends listen to music read a book write a letter

learn karji stand by the door play catch drink some water

●例にならって書いてみよう。 The girl is listening to music.

- ① 1 Listen では、誰のことを説明しているかを聞き取らせる。
- ② 2 Speak の活動のヒントとなるよう、Word Bank の語句を導入し、発音練習をさせる。

- ③ 2 Speak では、Word Bank の語句などを手がかりに、教科書の中から絵を選んで説明する、どの絵の説明かを当てるといった、発展的な練習を行わせる。ペアで取り組ませる前に、教師が生徒と一緒に実演するとよい。また、絵を選ぶ範囲を指定したり、掲示したピクチャーカードから選ばせたりすると取り組みやすくなる。

- ④ 3 Write では、発話した英文を書かせる。口頭で再度言わせる、時間を区切って書かせる、落としやすい be 動詞に注意を向けさせるなど、効率よく進行する。

(4) 本文の内容理解と音読練習

- ① 本文中の語彙の音声・意味・使い方を説明し、発音練習をさせる。
- ② 本文を黙読させて、発問によって細部を理解させる。
- ③ GET Part 1 の挿し絵を説明することを目標に、内容や表現に気をつけながら音読練習をさせる。

(5) 本文中の写真や絵の説明

GET Part 1 のゴールとして、本文を見ずに、挿し絵の人物の動きを説明させる。

S: Ms White is teaching language arts. This girl is reading a book. This boy is practicing a speech. These students are making a poster in a group.

このように、発話の内容は本文とほぼ同じになる。しかし、本文の意味内容や現在進行形を理解したうえで、絵の説明として行われる発表であるため、GET Part 1 での学習の成果が表われたものとなる。

目標達成のためのつながり

文法、語彙、本文、言語活動のそれぞれを、単にいてねいに扱おうとすると、時間が足りないだけではなく「活用」に結びつかない。本課では、最初に設定した「身近なものについて、写真や絵を用いて簡単に説明する」という目標を受けて、GET の目標を明確にしたことで、文法、語彙、本文、言語活動を全体としてつなげることができた。各課の場面や内容に着目して、GET においても適切な目標を設定し、目的に合ったパーツを用いて、NC の特長を十分に生かした指導をしていただきたい。

特集 さまざまな課題に対応するために

アクティブ・ラーニングで4技能を育てる —USE Readをジグソー法で読み進める

山本 崇雄 (東京都立両国高等学校)



生徒がアクティブに主体的に学ぶために

次の学習指導要領の全面改訂では、アクティブ・ラーニング(以下AL)*が改訂の主役になりそうである。ALは文字通り、生徒が主体的、能動的に学ぶことを指す。このような学習方法について学習指導要領で触れることはこれまでになかったことを考えると、一歩踏み込んだ画期的な改訂になりそうだ。本稿では、典型的なALの手法であるジグソー法を使い、一足先にALを授業に取り入れる方法を述べていきたい。

ジグソー法**

ジグソー法はカリフォルニア大学サンタ・クルーズ校の名誉教授エリオット・アロンソンによって編み出された学習方法である。グループのメンバーがそれぞれ異なった情報を持ち寄り、ジグソーパズルのように組み合わせると全体像が見えてくるとい

仕掛けだ。

Book 2 Lesson 3 USE Read を例に

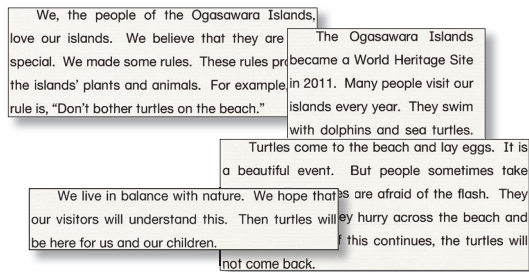
【レッスンのゴール】

「教科書の絵を使って、内容を英語で話す(書く)ことができる」

【準備】

- ・教科書本文をコピーし、段落ごとに4つのパートに切る。
- ・教科書の挿絵、写真を切り貼りしたワークシート①(Oral Presentation Sheet)を作成する。
- ・ワークシート①の裏面に、内容を書き取るワークシート②基礎・発展を作る。

〈4つのパートに切った本文〉



〈ワークシート① Oral Presentation Sheet (表面)〉



〈ワークシート② 基礎 (裏面)〉

()に英語を入れよう。

1段落 The Ogasawara Islands became a _____ in (). _____ visit our islands () year. They swim with () and _____. They enjoy ...

2段落 We, the people of ...

〈ワークシート② 発展 (裏面)〉

要点をメモしよう。

1段落

2段落

【授業での手順】

(1) Guess Work (3～5分) …考える

Oral Presentation Sheet (ワークシート①)の写真を見て、どんな話が想像させる。

①各自、写真の下にキーワードを記入する。

※和英辞書を使わせてもよい。

②ペアまたはグループでキーワードをシェア。

対話例：What can you see in this picture?

— I can see a turtle in this picture?

What's the story about? — I think this story is about the Ogasawara Islands.

(2) リスニング (3分) …聞く

①USE Readの本文を聞き、キーワードを追加する。

②ペアまたはグループで情報をシェア。

(3) Read & Tell (ジグソー法) (10～15分) …読む

教科書本文を4つに切ったものをそれぞれ教室の四隅に貼る(四隅に貼るので、4 corners と呼ばれる)。隣の教室の理解が得られれば、廊下やバルコニーでもよい。次に4人グループを作り、それぞれが1つずつ貼られた情報を読みに行き、ワークシート②を完成する。ただし、ワークシートは机の上に置いたままとし、読みに行く際にメモを取ってはいけ

ない。また、何度読みに行ってもよいが、必ず暗記し、戻ってから書く。

ワークシート②基礎は、()には1語、__には複数の語を入れる穴埋め形式になっている。()や__は、読解のキーになる語句を中心に選ぶことで、読む際はそれらに集中することができる。このキーになる語句を何度も読み、意味を考え、書き写す作業が、後に全体を読むときの助けになる。

ワークシート②発展には要点のみを記入させる。限られた時間で、全ての英文を書き写すことは不可能なので、必然的に要点を要約することになる。

ポイント

- ・初めて読むので、発音のわからない語もあるが、想像させて発音させる(間違ってもよい雰囲気を作る)。
- ・意味がわからない語は積極的に辞書を引かせる。
- ・教師は巡回し、随時支援する。
- ・発展的な生徒には2つ以上読みに行くよう指示を出す。

(4) 発音練習 (5分) …話す

新出語を中心にフラッシュカードを用いて、発音練習をする。(3)で誤って発音しているものを修正する。時間があればフラッシュカードの前に、全体をもう一度聞かせても効果的である(CDを聞き、発音の誤りに気づく能力を育てることができる)。

(5) 発話練習 (Oral Presentation) (10～15分)

①教師と一緒に絵を指しながら、発話練習をする。

②ペアで、絵を指しながら、英語でストーリーを説明する。ペアをかえて複数回練習する。

後日、発表をさせれば、表現の能力(Speaking)の評価もすることができる。

1時間の授業で行うことを想定し、時間配分の目安を記したが、生徒のレベルによって活動時間を調整したり、ワークシートを工夫したりすることができる。次の時間に、より細かい発音指導や文法指導をするとよい。まとめに、教科書の絵を使って英文を書かせたり、自分の感想や意見を書かせたりするとWritingの力も育てることができる。

ALは人間関係も育てる

ジグソー法を使うことにより、長い文章を分担し、読む量を減らすことで、苦手な生徒も取り組みやすくなる。また、しっかり読まないとグループのメンバーに伝えられないので、「誰かのために読む」というモチベーションになる。情報を仲間から得たときは必ず“Thank you.”と言うよう促し、お互いの存在意義を高めさせるとよい。学校生活の中で「ありがとう」を言ったり、言われたりする場面は意外に少ない。授業の中で複数回ペアをかえ、何度もいろいろな人に感謝することが、クラスの人間関係を育てていく。英語の4技能を育てるだけでなく、大きなおまけもついてくるのが、ALの素晴らしい点である。

* アクティブ・ラーニング

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

文部科学省 中央教育審議会(2012).『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて 用語集』。

** ジグソー法

Just as in a jigsaw puzzle, each piece — each student's part — is essential for the completion and full understanding of the final product.

Aronson.“The Jigsaw Classroom”<https://www.jigsaw.org/>

特集 さまざまな課題に対応するために

中学校入門期における文字指導

吉田 晴世 （大阪教育大学）



はじめに

言語習得は、母語習得であれ、第二言語・外国語習得であれ、「聞く」ことから始まる。小学校学習指導要領（外国語活動）には、「外国語の音声やリズムなどに慣れ親むとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと」とあり、これは音声を基軸とする指導の必要性に言及したものである。文字指導もその延長線上にあり、音声を無視した文字指導は避けられなければならない。

本稿では、小学校外国語活動における文字指導の現状を述べ、そのような経験を持つ中学1年生を対象とした、音声に基づく文字指導を提案したい。

小学校での文字指導

小学校で「話すこと」「聞くこと」を重点的に学んだ子どもたちが中学校に入学したとき、文字を介した学習をしていない状態での中学校の英語の4技能を習得することの難しさについて、しばしば指摘される。音声指導のみでは、結果としては、中学校ではもう一度文字を介しながら「話したり、聞いたり」することを指導しなければならない。これでは、子どもにとって負担でもあり、指導する教員側の負担にもなることが想定される。

確かに、子どもの言語習得の観点からも、音声を主に扱った内容の指導が小学校の段階から行われることの意義は明確である。しかし、高学年の子どもたちは、特に6年生にもなると、「文字」への関心や興味を示すようになる。低学年の子どもは、無意識に先生が言う通りに発音するため、正しい音を身につけさせることが大切である。しかし、高学年の子どもは、音声の指導だけでは十分でない。高学年

は抽象概念への理解を示すようになり、文字を使用した言語活動にむしろ興味を示すようになる。したがって、児童に語彙を導入する際には、語彙を提示する絵の下に文字を提示することで、児童は、音声の補助として、文字を効果的に認識できるようになる。

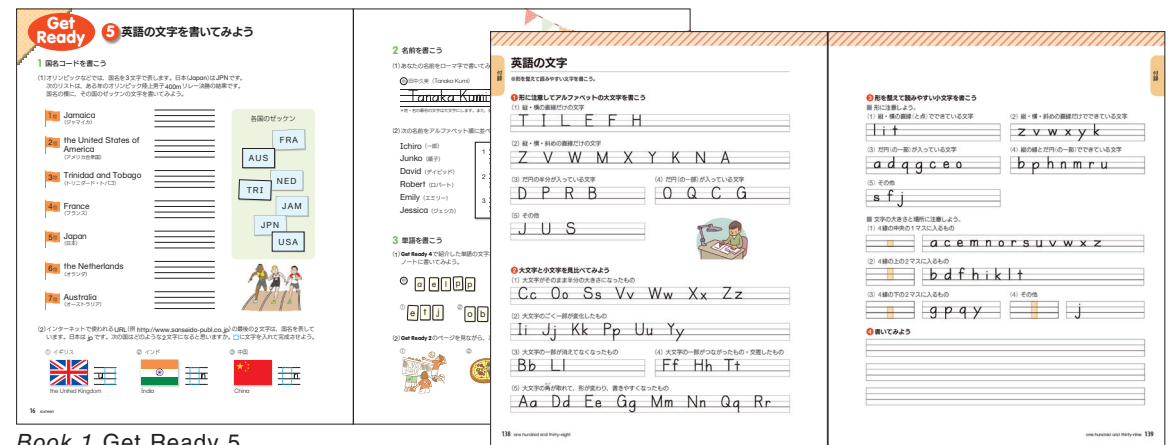
小学校段階では、上述のように絵と文字を同時提示することに加え、歌・チャンツ・ゲーム等の活動を通じて音と文字に慣れ親しんでいる。書く指導を導入している小学校もあるが、ペンマンシップ等の練習帳を用いての指導はとても稀で、ストロークの規則性などは教わっておらず、文字をなぞったり、書き写したりするという段階でとどまっているのが現状であろう。

中学校での文字指導

ここでは、28NCを活用した、中学校入門期における「文字の書き方」のについて提案したい。

(1) 大文字・小文字の指導

Book 1 Get Ready 5の1では、オリンピックという多くの生徒が興味を持ち、身近に感じる題材を扱っている。競技選手のゼッケンでは、国名を3文字で示すことに気づかせ、スペルアウトされている国名と、それを表す大文字3文字をマッチングさせ、四線上に大文字を書かせるタスクを課している。続く設問では、インターネットで利用されるURLアドレスの最後の2文字(.xx)は、国名を表していることを明示することで、「文字(ローマ字)への興味」を持たせるよう仕組まれている。ここでは小文字を書きながら、大文字とは異なるとことに気づかせ、四線上の位置や大きさも違ってくるとも確認させることができる。書かせる際には、



Book 1 Get Ready 5

Book 1 付録 英語の文字

[j,a,m,a,i,c,a (1文字ずつ名前読み), Jamaica [dʒəmeɪkə], J,A,M (1文字ずつ名前読み)]というように発音してから書くことで、アルファベットの音と文字との結びつきを強化する。他の国については、「世界の国名・地域名および国旗・域旗と各種略号」を示すウェブ・サイト (http://www.geocities.jp/chr_cyobi/country-code.html) を利用すれば、練習量を増やすことが可能となる。

(2) 単語を書く指導

Book 1 Get Ready 5の3では、生涯を通じて最も書く機会の多い、自分の名前を書く練習に入る。注意点としては、氏名の初めの文字はそれぞれ大文字であること、四線上での文字の位置、文字間隔、日本名の場合は訓令式(Itiro)ではなくヘボン式(Ichiro)となることである。また、英語名は日本語に無い発音があり、それに伴い綴りも異なることを説明する必要がある。ここでも、1文字ずつ「アルファベットの名前読み」をしながら書く練習をするといふ。

次に、単語を書く練習に入るが、小学校で慣れ親しんできた「アルファベット・フォニックス・ジングル」を用いながら“apple, apple ... a a a”と教えたら,appleのaの母音の「音読み」が定着し,a [æ]で始まる他の単語を追加しても、違和感なく学べる。

(3) 活用したい資料 (Book 1 付録 英語の文字)

①では、大文字の形に着眼してグループ分けされているので、P.16の大文字3文字の練習の際にあ

わせて提示すると効果的である。あくまでも、大文字は、四線の上から3本目より上に書くことを強調したい。②では、各文字の、大文字と小文字で比較をしており、(1)から(5)と次第に類似性が無くなってきていることに気づかせる。英語は文字数が限られており、大文字26個と小文字26個の52文字だけを使って単語を作っているの、大文字と小文字の区別や綴りがとても重要な役割を果たすことを明確に説明しておきたい。③では、小文字に焦点をあてているが、特に「文字の大きさと場所」については、グループ別に押さえておきたい。中でも、四線の上から3本目の下までくる“g, p, q, y, j”の5文字は、大文字やその他の小文字にはないパターンであるが、学年が上がり、さらには高校・大学へ進んでも、きちんと書けない場合が多く、3本目の下までくことさえ知らない生徒・学生もいるのが現状である。

おわりに

文字指導はとても時間がかかり、授業時間配分で悩む部分であろう。生徒にとっても、小学校の外国語活動で音を中心とした活動が大半を占めていた分、黙々と大文字・小文字・句読点などに気をつけながら、何度も書き続けることに抵抗感を覚え、英語嫌いになる場合も少なからずある。そのようなときに、音声を取り入れ、フォニックス・ジングル等を活用して、リズムカルに文字指導を行うことで、音と文字の結びつきを体得しながら書くことへの楽しみを促すことが可能となるのではないだろうか。

特集 さまざまな課題に対応するために

発問を活用して
授業に生徒を引き込もう

田中 武夫 (山梨大学)



教科書を使って生徒の興味をどう引きつけるかは、英語教師に共通する悩みの1つです。生徒に投げかける発問を少し工夫してみるだけでも、知的に楽しくスムーズな流れの授業になります。ここでは、28NCの教科書を使った具体例を、1) レッソンの「とびら」の写真、2) GETの本文、3) USE Readの本文、の3つのセクションに分けて見てみましょう。

本稿では、Book 3のLesson 2での発問を考えます。このレッスンでは、現在完了形の継続用法を理解させることと、フランスと日本の文化交流についての説明文を理解させることが目標になっています。

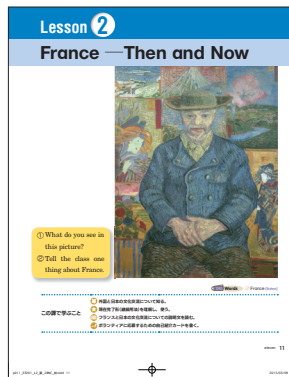
「とびら」の写真を使った発問例

28NCでは各レッスンのとびらに、レッスンで扱うトピックに生徒の意識を向けるための印象的な写真が用意されています。では、下の写真を用いてどのような発問ができるでしょうか。具体例を見てみましょう。

※＜＞内は生徒の発話例
T: Look at this picture. Who painted this picture?
Can you guess? Gogh painted this picture.
Have you ever heard of Gogh? Yes, he is a very famous artist.

Then where did he live? Do you know the country? <フランス>

T: That's right. Do you know anything about France? Tell us one thing about France.<エッフェル塔、フランス料



Book 3 Lesson 2 とびら

理、ルーブル美術館>

T: Look at the picture again. What do you see in this picture? <さくら、富士山、浮世絵、雪景色>

T: Why did Gogh paint Japanese things in his picture? We are going to read about the relations between France and Japan. OK?

このように、写真を使ってやりとりしながら、「なぜゴッホは日本のものを自分の絵に描いたのでしょうか?」と生徒に軽く尋ねてレッスンに入れば、本課で扱う主題に対し生徒の知的好奇心を高めることができるはずです。

GET ミニ本文での発問例

GETでは、基本の文法項目を含む短めの英文テキストが用意されています。では、現在完了形の継続用法を導入する以下のテキストでの発問を考えてみましょう。

Book 3 Lesson 2 GET Part 1

I'm Marie Dupont, a dress designer from France. I came to Japan three years ago. I have lived in Midori City since then.

このテキストを使って、現在完了形の継続用法の意味や用法について生徒に考えさせるには、どのような発問が考えられるでしょうか。次の例を見てみましょう。

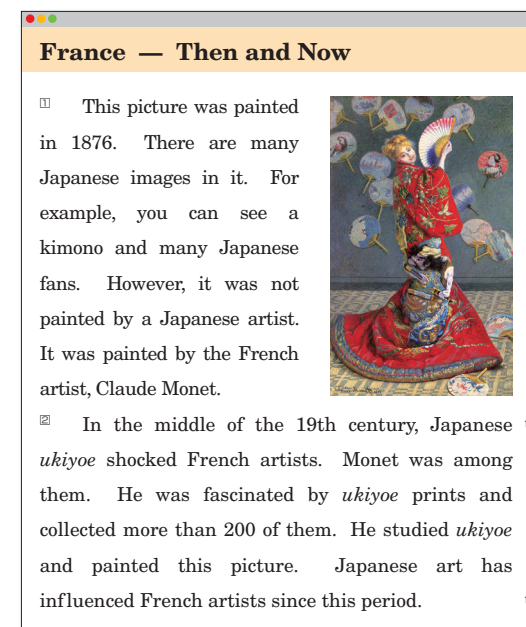
T: Ms Dupont knows a lot about Midori City. Is it true or false? < True >

T: Why do you think it is true? Tell us the reason based on the text. < 3年前に日本に来て、それ以来ずっと緑市に住んでいるって書いてあるから> < 3年間、緑市に住んでいればよく知っている>

ここでは、「デュボン先生は、緑市に詳しいかどうか」という、テキストには直接書かれていないことを推論させています。生徒からは異なる考えが出るかもしれませんが、「I came to Japan three years ago. I have lived in Midori City since then.」の2つの文から、「3年前から緑市にずっと住んでいる」と考える生徒がいるはず。現在完了形の継続用法がどのような文脈の中で使われるのかを生徒自身に説明させることができれば、他の生徒もスムーズに理解できるでしょう。

USE Read の本文での発問例

では次に、USE Readにおける発問例を見てみましょう。次の本文は、日本文化を紹介するウェブサイトの一部として紹介しており、昔も今も日本文化がフランスに影響を与えていることを解説する説明文です。



Book 3 Lesson 2 USE Read

この本文を使ってどのような発問ができるでしょうか。同じテキストを何度も読ませるための1st/2nd/3rd Readingの3つのステップで考えることにします。

<1st Reading> 1st Readingでは、内容の概要をつかませるために、事実情報を尋ねる発問を活用します。易しい問いから始めれば、すべての生徒

がスムーズに取り組めます。

T: When was the picture painted? <1876年>

T: Find two examples of Japanese culture in the text. <kimono と Japanese fans>

<2nd Reading> 次に、テキストに書かれている詳細情報について尋ねる発問をします。

T: Answer the next questions.

- 1) Who painted this picture? <Monet>
- 2) What did Monet study before he painted this picture? <ukiyo>
- 3) What has influenced French artists like Monet? <Japanese art>

<3rd Reading> さらにテキスト内容を深く読み取らせるために、本文の情報をもとに推論させる発問が活用できます。では、次の例を見てみましょう。

T: Monet loved Japanese art very much. How much did he love Japanese art? Why do you think so? Find the answer in the text. <He collected more than 200 of them.>

T: What is “them” in “200 of them”? <浮世絵のこと。200枚もの浮世絵を集めていた>

T: What else? <“studied”と書いてあるので、浮世絵について勉強した>

T: Japanese art was popular in the 19th century but it is not popular now in France. Is it true or false? Find the reason in the text.

T: When is “this period” in the text? <19世紀>

T: “Japanese art has influenced French artists”と“Japanese art influenced French artists”とではどのように意味が違うと思いますか? <「今もずっと影響を与えている」と「影響を与えた」という意味>

このような発問を通して、現在完了形がある過去の時点から現在まで続いている状態を表すこと、そして、昔も今も日本文化がフランスに影響をずっと与えていることを理解できるように導くことができるでしょう。

特集 さまざまな課題に対応するために

妥当性を意識した
テスト作りにおける留意点

佐藤 臨太郎 (奈良教育大学)



佐藤くんと先生の会話

中学2年生の佐藤くんと英語の先生の会話です。
佐藤くん「先生、いつも点数の一番悪い英語の定期テスト、今回は、英文をしっかりと暗記して読もう覚えて、いい点数をとれたと思います。」
先生「そうか、それはよかった。採点が楽しみ！これから頑張ろうね。」

佐藤くん「はい、なんだか英語が少し好きになれそうな気がします。頑張ります！」

英語の苦手な生徒が頑張っている点数を取ってくれるのはうれしいことです。教師冥利に尽きますね。ですが、ちょっと待った、です。はたして今回の佐藤くんの受けた定期考査はちゃんと英語の力を測定しているのでしょうか。

妥当性と信頼性

妥当性 (validity) とは、作成したテスト問題が測ろうとする技能・能力を評価するのに妥当であるかどうかということです。例えば、受験者の発音能力を測定するのに、written test で、「最も強く発音される部分はどこか」や、「下線部の発音が同じ単語はどれか」などと尋ねても、それは実際に発音できる能力ではなく、語彙の発音に関する知識を問うことになるので、発音能力測定には妥当性が極めて低いといえます。佐藤くんの例では、ただ英文・日本語訳を暗記しただけで高得点が取れるのであれば、暗記力のテストとしては妥当性が高くて、英文読解力に関しては妥当性が低いということになります。

信頼性 (reliability) とはそのテスト問題が、常に信頼できる一貫性の測定力を持っているかどうかということです。つまり、ある種のテストを何度受け

ても結果が大きく変わらないで安定しているのなら信頼性が高いといえます。佐藤くんの場合だと完全に暗記できているのなら、何度受けても高得点が取れるので、信頼性が高いといえることになります。しかしながら、ここで問題なのは、いくら信頼性が高くても妥当性が低ければテストとしては失格であるということです。持久力を測るのに、100m 走を何度測定しても意味がないのと同じことです。テスト作成においては、まず第一に、測ろうとする技能・能力をしっかりと測れる妥当性の高い問題を作成すべきということになります。

ではどのように？

定期考査で生徒の読解力を測るのであれば、初見の英文を問題文として出題することが有効です。しかしながら、定期考査は生徒の能力がどれくらいあるか測る実力テストなどの「熟達度テスト」とは違い、テストの範囲についてどの程度理解しているかを調べる「到達度テスト」であるので、授業で扱った内容が反映されるものでなければいけません。では、28NC Book 2 Lesson 6 My Dream の USE Read を例に、具体例を提示してみます。

提案 1 テキストタイプを教科書に合わせる：ここでは、職場体験プログラム後の健のスピーチが題材になっているので、問題文も他の誰かのスピーチの形式にし、情報の一部に変更を加える。

提案 2 スピーチをパラフレイズした英文にする：健のスピーチの内容を第3者が述べているかたちで、基本的に重要な情報はそのままパラフレイズする。

提案 3 テキストタイプをダイアログにする：スピーチを聞いた友人2人が、その内容について

会話している英文を提示する。

提案 1～3 では、扱う文法項目である to 不定詞の副詞用法、形容詞用法を含む英文、新出単語を含む英文を必ず入れるようにする。

提案 4 健のスピーチを精巧化する：スピーチに追加の情報や詳しい説明を加えた英文を提示する。

提案 5 問題の選択肢を初見の英文にする：健のスピーチと、穴埋めにした要約を提示し、同じ意味になる表現を選択肢から選ぶ問題にする。

初見の英文を作成する際、「内容」、「形式 (文法事項、表現、語彙)」の共通性に留意することが必要です。共通性が高ければ高いほど、難易度が低い (生徒には答えやすい) ということになります。

以下は提案 1 の例です (下線部は変更箇所)。

Hello, everyone. What do you want to be in the future? I want to be a veterinarian, or an animal doctor. I have two main reasons.

First, I like animals, especially dogs, very much. They are cute. When I was a child, I liked to play with a puppy at my grandmother's home. I used to play with my cousin's very big dog in Hokkaido too. Now I have a big dog, Taro. We take a walk every morning.

Second, dogs can do many things. There are dogs to rescue people and dogs to play with people. Now dogs care for people too. When I was in a nursing home, I saw a woman in poor health. She held a puppy. She was smiling and talking to it. She looked very happy because she had a wonderful friend.

In conclusion, dogs are not only cute but also useful. In the future, dogs will play a bigger part in our lives. I want to cure injured dogs and dogs in poor health. I have many things to learn. I will study hard to be a veterinarian. Thank you for listening.

出題問題としては、本文から情報をそのまま見つける “Right there” 型 (例: What does he want to be in the future?), 内容を読み取り、答えを出す “Think and search” 型 (例: What is the main point of the speech? [選択肢から選ばせ

る]), さらにプロダクティブな質問として生徒自身に考えさせる “In your head” 型 (例: What do you want to be in the future? And why?) 等が考えられます。最後の質問は読解力を測るのではなく、生徒のライティング能力測定を意図した問いになります。

佐藤くんはどうなるの？

初見の英文を提示したり、教科書の英文を変更することにより、機械的な丸暗記では対応できない妥当性の高い問題を作成することができます。このような考査を実施することにより、英文を理解しないで暗記しても高得点はとれないと生徒に理解させ、日頃から理解して覚えていくという学習姿勢を促すことになります。このテストが学習に与える影響のことを「波及効果」といい、今回の提案においても、長期的にみて生徒に良い波及効果を与えることができると考えられます。

それでは、最初に出てきた佐藤くんはどうなってしまうのでしょうか。私は個人的には定期考査においては、生徒の頑張りを評価してあげる余地があるべきだと考えます。事前に出題する問題の形式、内容の一部 (場合によっては問題そのもの) を知らせ、生徒に「勉強すると必ず点数が取れる」と気づかせることで動機づけを高めたり、本文の英文をそのまま使い、授業で扱った問題も考査に入れることにより、生徒の授業への取り組みを高めることができます。英語が苦手な佐藤くんでも勉強すれば必ず点数が取れるという問題を考査に入れることも不可欠であるといえないでしょうか。

まとめ

定期考査では、英語力そのものを測るという妥当性の高い問題と、その意味では妥当性は低い英語の苦手な生徒にも易しい問題を併用していくことが必要であると考えます。それぞれのタイプの問題の難易度と、両者の割合については、担当の先生が、生徒のレベルや動機づけ、日頃の授業内容、授業での活動から判断し、決定していくとよいでしょう。

ちなみに、佐藤くんはその後、英語が好きになっていき、今、英語教師として頑張っているそうです。

特集 さまざまな課題に対応するために

学びたいことを探し、選び取っていく学習 —自律的学習への第一歩

亘 理 陽 一 （静岡大学）



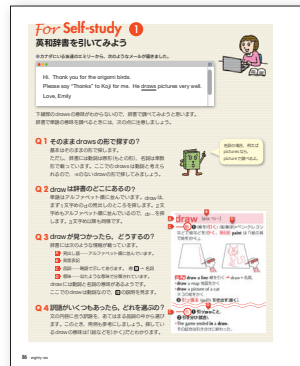
はじめに

「自律的学習者」は、学習管理・認知プロセス・学習内容という互に関連する3つの次元において自分の学習をコントロールできる学習者だと言われます (Benson, 2011, p.61)。もちろん学習者は最初から自分の学習をコントロールできるわけではないので、中学校3年間の目標に全ての次元の完全なコントロールを置くのは求めすぎでしょう。だからと言って、自律に向けて何もなくていいということにはなりません。卒業後も長く続く外国語学習において学びたいことを自ら探し選び取っていくためにも、種を播き、芽吹かせるために、中学校の内にできることはたくさんあります。当然、その過程で教師が担うべき役割も重要です。

「学習管理」には、「学習の目的を決めたり、学習のために取る方法や学習のために必要な技術を選択したり、学習のペースや学習時間をモニターしたり、学習を評価したりすること」が含まれます (大学英語教育学会学習ストラテジー研究会(編), 2006, p.17)。教科書はまさに全体を通じてその主要な手段を提供するわけですが、28NCには特にFor Self-studyやReviewというコーナーが設けられています。これを活かさない手はありません。

辞書の活用と語彙学習方略指導

28NCでは各学年で、辞書の使い方や活用法、語彙学習法を紹介しています。それまでに学んだことの確認やまとめとして取り上げるのも1つですが、むしろ学習のきっかけとして活用してはどうでしょうか。例えばBook 1の最初のFor Self-study「英和辞書を引いてみよう」はLesson 7の前にあ



Book 1
For Self-study ①

りますが、その前のLessonやProjectで辞書を引く機会があるでしょう。その際、このページに立ち寄って辞書の引き方・見方を解説することで、「自分が何かを伝えたり理解したりするために必要なときに辞書を引く」という学習管理の経験となります。

同時に、教室にある辞書や学習者が持っている辞書との異同、そして辞書が与える「語義」と文脈に適切な「訳語」選びの違いを確認することも重要です (笠島, 2002)。複数の辞書で用例や似た単語の使い分けの説明を比較したり、Book 2「英和・和英辞書を活用しよう」で、身近なカタカナ語が英語でどう表現されるか収集したりと、それ自体を調べ学習とすることもできるでしょう。このような活動を通じて初めて、For Self-studyやReviewが学習者にとって「いつでも立ち戻ることのできる場所」になると考えます。

語彙学習については、Book 1とBook 3に分けて、音声化・身体化・文脈化・ネットワーク化・リスト化の各方略を紹介しています。こちら、各Lessonの語彙の導入・定着のための観点として活用することができます。普段からこの観点でのセル

フチェックを促すことで、授業外でも、孤立した単語の綴りを目で見るだけで覚えた気になる学習者は減るでしょう。その前に教師が、既習語やこれから登場する語句を用いて、各方略の組み合わせ方の具体例を継続的に示すことが重要です。教師の、音声化や身体化をためらわない姿や、身近な例に置き換えたり関連するものをつなげたりするアイデアが語彙学習のモデルとなるのです。

学び方のレポトリと学習の履歴

Book 2とBook 3で紹介している映画や音楽、インターネット等を通じた英語学習法は、具体例を増やすことが重要です。The Tale of Peter Rabbitの実物やビアトリクス・ポターを描いた映画を紹介したり、小笠原諸島や寿司が英語のウェブページでどのように紹介されているかを検索して見せたりすることで、教科書で学んだ内容をさらに深めることができます。

Book 3「教科書の外で英語に触れよう」で取り上げている山中伸弥教授の講演は、内容は専門的で、そのまま見せるだけで中学生が理解できるとは考え難いものです。ここでの主眼はむしろ、インターネット上の英語(学習教材)を始めとする様々なソースの活用法を考えることにあります。これまでのラジオやテレビ番組と同様に、たとえ生の英語が豊富に用いられていても、漫然と見聞きしているだけでは理解もできず、学習には繋がりません。ここで提示されているような目的やステップを学習者が自ら設定できるようになるのが理想ですが、まずは授業での活用を通じて、理解が深まる経験を増やしましょう。例えば同じBook 2のLet's Read 2はTEDでのスピーチと繋げることができます。

現状では、学習者がみなこうしたツールをいつでも利用できる環境にあるわけではないでしょう。しかし、だからこそ、授業内外で教師自身が活用の姿を示し、求められたときに学習者に的確なアドバイスをできることが望ましいと言えます。教師自身がこれまでに取り組んできた方法・経験を伝えること、あるいは生徒同士で学習法のレポトリを共有する機会を定期的に設けることも有効でしょう。そこから興味を広げたり、自分の好きなものと英語学習



Book 3
For Self-study ②

の接点を見いだしたりできれば、学習者にとって英語が「わがこと」となり、学習目的も明確にしくなります。

同時に、ワークシート等を通じて学習者が経験した学び方や内容の履歴を蓄積していけるようにすると、For Self-studyやReviewは3年間を通じてさらに効果的なものとなるでしょう。これは、辞書の活用・語彙学習方略についても当てはまることです。引きっぱなし、やりっぱなしにせず、自分がどういう単語をどういう場面で調べたのか、方略の使い方はどのように変化してきたか確認できるようにすることで、学習のモニタリングが促されます。教師もフィードバックを返しやすくなるでしょう。

おわりに

重要なことは、いずれも学習者任せにするだけではその真価を発揮し得ないということです。「学習者は意味のある選択の機会を与えられることでやる気を出すのである。やる気があるから選択をするのではない。学習者にとって意味のある選択の機会を提供するには、教師は、選択の幅と質を整え、学習者を選択できる状況に導いていかなくてはならない」(青木・中田(編), 2011, p.10)。28NCのFor Self-studyやReviewがそのための一助となることを願っています。

【参考文献】
 青木直子・中田賀之(編)(2011).『学習者オートノミー』ひつじ書房.
 Benson, P. (2011). *Teaching and Researching Autonomy* (2nd ed.). Harlow: Pearson Education.
 大学英語教育学会学習ストラテジー研究会(編)(2006).『英語教師のための「学習ストラテジー」ハンドブック』大修館書店.
 笠島準一(2002).『英語辞典を使いこなす』講談社.

特集 さまざまな課題に対応するために

定着させるための繰り返し学習

三野宮 春子 (神戸市外国語大学)



1. 知識はネットワークしてこそ定着する

英語学習において反復練習は重要だ。しかし、機械的に繰り返すだけでは結果に結びつかない。「うちの生徒たちは、覚えたことを次の時間には忘れていく」「知っている表現なのに別の文で使えない」と感じるときは、理解を伴わない丸暗記をさせていないかどうか、授業や宿題を点検することを勧める。丸暗記は手っ取り早いですが、効果は薄い。反対に、理解は記憶保持を助け、理解して覚えた知識は応用が利く。「理解」には、いろいろな知識や技能を統合しネットワーク化(精緻化)する過程が含まれる。反対に「丸暗記」とは、語や文法事項をバラバラに整理せず覚え込むことである。なかでも、訳語だけに頼る丸暗記は危険である。以下、単語と文法を取り上げて理解と反復について述べ、言語活動の例を示す。

2.1. 単語を理解して覚える

1. 聞く = (h)

単語テストに合格するようプレッシャーをかけると、生徒は短絡的に「聞く = hear」と丸暗記してしまう。その結果、発音や用法はあやふやなままとなり、テストが終われば綴りも忘れる。

教師にとって、ear[iə] の頭に h がつくとき hear[hɪə], y がつくとき year[jiə] になることは、自明のように思われる。しかし生徒は、「エイチ、イー、エー、アール。エイチ…」と気力だけで何とかしようと苦しんでいる場合も多い。

音と綴りには関連があることを理解して覚える方が、音も綴りも長く覚えていられるし、別の新しい語を覚えるときにも応用できる。意味や用法に関し

ても、規則性と例外を理解したり、単語を使って文を作ったりするような活動を十分に提供する方が、長期的には効果的な定着が期待できる。

2.2. 単語を反復練習して定着させる

NEW CROWN にはイラストがふんだんにある。生徒が日本語を介さずに語句の意味をつかんだり、その語句のイメージを広げたりできるよう、有効利用したい。例えば下のイラスト (Book 2 Lesson 6 の Word Bank より) は、vet と animal, dentist と drillなどを繋ぎ、ネットワーク化しながら語句の意味を把握するのに役立つ。



ひと手間かけて、表にイラスト、裏に単語を書いてカードを作ると、いろいろなゲームができる。

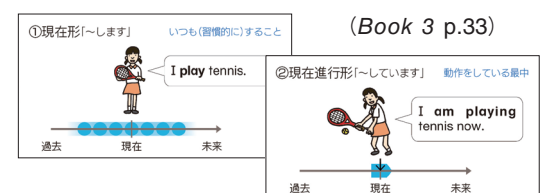
- イラスト面が見えるように並べて行うゲーム
 - 教師が語句を発音するのを聞き、カードを取る
 - 教師が語意を説明するのを聞き、カードを取る
 - 綴ったときに辞書に出てくる順に並べ替える
 - 綴ったときに文字数の多い順に並べ替える
 - 文字面が見えるように並べて行うゲーム
 - 教師が掲げるイラストを見て、カードを取る
 - 教師が語意を説明するのを聞き、カードを取る
 - 意味的に関連が深い語句をグルーピングする
 - ランダムにカードを引いて(配って)行うゲーム
 - 引いたカードに書かれた語句を使って文を作る
 - 3枚引いたカードの語句を使いストーリーを作る
- このようなゲームを帯活動にすれば、手順の説明を省いて短時間で実施できるようになる。また、

Word Bankのカードを作りためて品詞ごとに分類しておく、さらに多様な単語ゲームが可能だ。数か月前の古いカードを時々混ぜることで、短・中・長期のインターバルで復習ができる。

3.1. 文法を理解して覚える

2. 私は毎日勉強している。
= () every day.

現在進行形を「am/are/is ~ing = ~している」のように暗記してしまう生徒は多い。これでは、習慣を表す現在形と区別がつかなくなってしまう。



単純形と進行形のほかにも、形や訳語が似ている文法事項は多い。28NCのReviewには、複数のレッスンの文法事項がまとめられているので、類似点や相違点を整理するうえで利用価値が高い。学習者にとって直感的に文法構造の核イメージをとらえやすいようにイラストや例文が工夫されているので、教師が一から十まで解説するかわりに、生徒が推論できるよう働きかけるのもよい。

3.2. 文法を反復練習して定着させる

文法構造について教師が明示的に解説することは大切だが、できるだけ簡潔明瞭な心がけ、生徒が練習する機会をたっぷり確保したいものである。

反復練習といっても、機械的な置き換え作業(日本語⇔英語、文構造A⇔文構造B)に終始しては、言葉としての英語の姿が見失われる。目標文法項目を使う必然性・整合性のある活動をデザインする力が、教師には求められるのである。

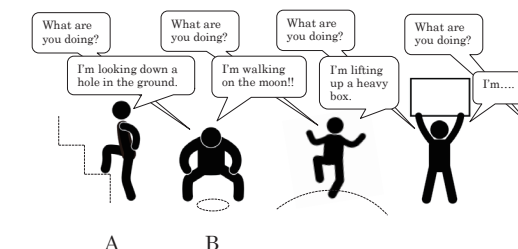
たとえば右上のイラストを示し、「人々がしていることを表す文を現在形を使って5つ作ろう」と求めるような練習の設定は避けたい。イラストはある日の公園の一場面(進行形が適当)なのだから、習慣を表す単純形(Two boys run.)はそもそも不適なのだ。



(Book 1
Get Ready 1
より)

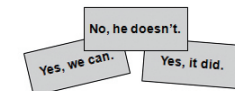
4. 生徒が考えて言いたくなる活動をデザインする

単調な繰り返しは、飽きる。褒めたり叱ったりして「我慢は必要だ」と教えるのも、教師の仕事の1つかもしれない。しかし本来は、生徒が「もっと続けたい」「なんで間違えたんだろう? もう一回やって確かめてみようかな」と自発的に学習するのが理想だ。そのための教師の仕事は、知的好奇心を刺激するような活動を入念に準備し提供することである。



即興劇の手法を応用したゲームを1つ紹介する。まずAが何かの動作をする。そこにBがWhat are you doing?と聞く。Aは実際にやっている動作(例. 階段を上る)と別のこと(例. 穴を覗く)を言う。Bは、Aが言った動作をする。以下、図のように続く。やってみて初めて実感できることだが、相手の言葉を受けて表現したり、自分の発想を他者が表現するのを見たりする活動は、意外性に満ちて飽きない。

姫路市立書写中学校の弓削先生は、疑問文の練習用に「アンサーカード」を開発し、授業やパフォーマンス評価で使っている。生徒はBook 1の終わりにまでに56通りの応答文を学習する。ペア活動では、各生徒がランダムに数枚のカードを持ち、そこに書かれた応答文を相手から引き出すような疑問文を考えて質問する。カードや相手によって毎回質問を変えるので、飽きずに取り組むことができる。



【参考文献】
弓削智晴、(2015)、生徒を巻き込むコミュニケーション活動を求めて、三野宮春子(編著)、授業談話を変えるアクティビティ開発:教師が手作りする授業、[神戸市外国語大学研究叢書]第56号 pp.86-87.

特集 さまざまな課題に対応するために

二極化に対応したい

NEW CROWN編集委員会

はじめに

「二極化に対応する」とは、目標を2つ作ることでない。ねらいとすることは、さまざまな生徒が混在する教室において、すべての生徒が、「授業が楽しい」と満足し、それぞれが力を伸ばせるような授業の組み立てを考えることである。

この点について、新しくなった28NCの(特に24NCで戸惑いの声が多く聞かれた)USE Readの扱い方と、USE Writeの具体的な指導例を提案させていただきたい。

USE Read の指導のポイント

昔から「題材のNEW CROWN」と呼ばれているとおり、USE Readの本文には、surprisingやinterestingな情報があり魅力的である。ここでは「読む」ことに集中させ、題材の良さを味わい、内容のある英文を読むことのおもしろさや意義を伝えられるように支援したい。英文を読み、それが理解できたときの感動や、わき上がる題材への興味は、生徒自らが「読みたい」と思う前提となる。

導入におけるオーラルイントロダクションは、本文の内容を押し並べて口頭で解説するのではなく、生徒が思わずその本文を読みたくするような話をしたい。例えば、Book 2 Lesson 5のUluruであれば、インターネットや資料を利用して得た、Uluruの画像や動画、情報をうまく使い、ながら旅行会社の営業マンのような気持ちで、生徒に「Uluruについてもっと知りたい」「本物を見たい」と思わせるように語りかけたい。

同時に、スキーマ(その題材に関する背景知識)を活性化させ、できるだけ本文中で使用されている

語彙を使用することで、英文を読む負担を軽くし、生徒が自分の力で読み進められるように配慮する。

また、リーディングタスクとして投げかける発問も大切である。内容理解を問うもの、YesかNoで答えるものだけでなく、魅力的な発問を考えたい。「ウルルで仕事が十分にできない職業が2つある。それは何と何か」「アナング族が現在困っていることがある。それはどんなことだろうか」など、ある程度本文を参考にしながらも、題材の中に入り込み、あれこれ思いをめぐらせて考えたり、友達と相談したりしながら、それぞれの発想で答えを見つけるような問題を与えてから、読ませているのはどうか。

読書は文字から風景を想像し、登場人物の心の動きを読み取る。教科書本文も同じように扱うことができる、その題材は誰にとっても魅力的になる。

英文が読めない生徒には、ある程度個別の支援が必要となる。例えば、今回の改訂から紙面の幅が少し広くなり、両脇の新語に日本語がついた。これを利用させるのもよいし、単語でのつまずきが原因であれば、教科書本文をセンスグループで分け、既習でも難しい単語の上に意味をルビで書いてあるプリント(下図)を用意することもできる。

English Series 2 Lesson 5 Uluru USE Read

Uluru

※スラッシュ(/)ごとに読んで意味を理解しましょう。

Ayers Rock is a famous place / in Australia.

It looks like a mountain, / but it is actually a very big rock.

It changes its color / during the day.

Sometimes it looks red / and sometimes it looks purple.

Book 2 Lesson 5 USE Read のプリント

大切なことは、自力で読むという小さな成功体験を重ねること、さらに生徒に英文を自力で読むコツや自分の課題(語彙力であったり、英語の語順やセンスグループの理解であったりする)に気づかせて、さらに伸ばしていくことである。

具体的なUSE Write の指導例

右はBook 2 Lesson 5のUSE Write

「好きな国についてエッセイを書こう」である。3段階で順を追って丁寧に指導手順が示されている。

1でモデルの提示がある。目標となるモデルを見せるだけでなく、文章の構造を分析して、「何を」「どの程度」書けばよいのが、どの生徒にも理解できるようになっている。

2では、「クラスやグループで協力して、「好きな国」について、エッセイを書く練習をしよう」という段階を踏むようになっている。いきなり個人で取り組むのではなく、グループで取り組むことにより、どの生徒も一通りの流れを学習することができるとともに、スローラーナーも、アイディアや着想の面で参加できる協働学習の強みをうまく活かすことができる。

そして3で、それぞれの発想で自由に取り組めるようになっている。スローラーナーにはモデル文やグループで作った文をできる限り参考にさせながら、自分で考えた文を少しずつ追加させる。ファストラーナーにはそれまでに学んだ言語材料を駆使し、必要に応じて辞書等を活用させながら、モデルを越える文章を自由に書かせるとよい。

実は、教師が中心となって一斉に教えるスタイルよりも、むしろ、活用を図る授業、自己表現や生徒が自由に考える生徒中心の授業スタイルの方が、学力の二極化には対応しやすい。生徒は自分の習熟にあった取り組みができ、教師はそれをつぶさに観察し、把握しながら、それぞれ個別に次の課題を示し

USE—Write

好きな国についてエッセイを書こう

1 先生がエッセイを使っています。

2 先生を模倣

3 先生を模倣

4 先生を模倣

5 先生を模倣

6 先生を模倣

7 先生を模倣

8 先生を模倣

9 先生を模倣

10 先生を模倣

11 先生を模倣

12 先生を模倣

13 先生を模倣

14 先生を模倣

15 先生を模倣

16 先生を模倣

17 先生を模倣

18 先生を模倣

19 先生を模倣

20 先生を模倣

21 先生を模倣

22 先生を模倣

23 先生を模倣

24 先生を模倣

25 先生を模倣

26 先生を模倣

27 先生を模倣

28 先生を模倣

29 先生を模倣

30 先生を模倣

31 先生を模倣

32 先生を模倣

33 先生を模倣

34 先生を模倣

35 先生を模倣

36 先生を模倣

37 先生を模倣

38 先生を模倣

39 先生を模倣

40 先生を模倣

41 先生を模倣

42 先生を模倣

43 先生を模倣

44 先生を模倣

45 先生を模倣

46 先生を模倣

47 先生を模倣

48 先生を模倣

49 先生を模倣

50 先生を模倣

51 先生を模倣

52 先生を模倣

53 先生を模倣

54 先生を模倣

55 先生を模倣

56 先生を模倣

57 先生を模倣

58 先生を模倣

59 先生を模倣

60 先生を模倣

61 先生を模倣

62 先生を模倣

63 先生を模倣

64 先生を模倣

65 先生を模倣

66 先生を模倣

67 先生を模倣

68 先生を模倣

69 先生を模倣

70 先生を模倣

71 先生を模倣

72 先生を模倣

73 先生を模倣

74 先生を模倣

75 先生を模倣

76 先生を模倣

77 先生を模倣

78 先生を模倣

79 先生を模倣

80 先生を模倣

81 先生を模倣

82 先生を模倣

83 先生を模倣

84 先生を模倣

85 先生を模倣

86 先生を模倣

87 先生を模倣

88 先生を模倣

89 先生を模倣

90 先生を模倣

91 先生を模倣

92 先生を模倣

93 先生を模倣

94 先生を模倣

95 先生を模倣

96 先生を模倣

97 先生を模倣

98 先生を模倣

99 先生を模倣

100 先生を模倣

Lesson 5

2 クラスやグループで協力して、「好きな国について、エッセイを書く練習をしよう。」

3 先生を模倣

4 先生を模倣

5 先生を模倣

6 先生を模倣

7 先生を模倣

8 先生を模倣

9 先生を模倣

10 先生を模倣

11 先生を模倣

12 先生を模倣

13 先生を模倣

14 先生を模倣

15 先生を模倣

16 先生を模倣

17 先生を模倣

18 先生を模倣

19 先生を模倣

20 先生を模倣

21 先生を模倣

22 先生を模倣

23 先生を模倣

24 先生を模倣

25 先生を模倣

26 先生を模倣

27 先生を模倣

28 先生を模倣

29 先生を模倣

30 先生を模倣

31 先生を模倣

32 先生を模倣

33 先生を模倣

34 先生を模倣

35 先生を模倣

36 先生を模倣

37 先生を模倣

38 先生を模倣

39 先生を模倣

40 先生を模倣

41 先生を模倣

42 先生を模倣

43 先生を模倣

44 先生を模倣

45 先生を模倣

46 先生を模倣

47 先生を模倣

48 先生を模倣

49 先生を模倣

50 先生を模倣

51 先生を模倣

52 先生を模倣

53 先生を模倣

54 先生を模倣

55 先生を模倣

56 先生を模倣

57 先生を模倣

58 先生を模倣

59 先生を模倣

60 先生を模倣

61 先生を模倣

62 先生を模倣

63 先生を模倣

64 先生を模倣

65 先生を模倣

66 先生を模倣

67 先生を模倣

68 先生を模倣

69 先生を模倣

70 先生を模倣

71 先生を模倣

72 先生を模倣

73 先生を模倣

74 先生を模倣

75 先生を模倣

76 先生を模倣

77 先生を模倣

78 先生を模倣

79 先生を模倣

80 先生を模倣

81 先生を模倣

82 先生を模倣

83 先生を模倣

84 先生を模倣

85 先生を模倣

86 先生を模倣

87 先生を模倣

88 先生を模倣

89 先生を模倣

90 先生を模倣

91 先生を模倣

92 先生を模倣

93 先生を模倣

94 先生を模倣

95 先生を模倣

96 先生を模倣

97 先生を模倣

98 先生を模倣

99 先生を模倣

100 先生を模倣

TEACHING ENGLISH NOW 特別増刊号 VOL.2 2015 23

22 TEACHING ENGLISH NOW 特別増刊号 VOL.2 2015

英語教科書

—異質性との出会いの場

北川 達夫 (日本教育大学院大学)



英語の教科書は、生徒にとって異質性との出会いの場である。いや、異質性との出会いの場でなければならぬ。

なぜ異質性との出会いの場でなければならぬのか。第一に、異質性と出会うことにより、自分自身をより深く知ることができるからだ。

生徒は英語の教科書において、英語という異質な言語と出会う。たとえば、その日本語とは異なる文法構造と出会うとき、それは英語の学びであるのみならず、日本語を客観的にとらえる視点の獲得でもある。英文法を学んで初めて、主語や述語という概念を実感するのではないだろうか。これまで無意識かつ習慣的に使っていた日本語が、英語の学習を通じて「言語」として認識されるのだ。

教科書のテキストにおいても、生徒は異質性と出会うことになる。たとえば、世界には、幼いころから武器を手にとり、地雷を埋めて敵と戦う子どもたちがいる。そういった子どもたちの存在を知ること重要だが、同時に自分自身の置かれている現状を客観的に思い知ること重要なのである。

日本文化を英語で紹介したテキストを読むとき、「こう言えば通じるのか!」あるいは「こう言わなければ通じないのか!」という驚きとともに、彼我の違いを実感することだろう。異質な他者に対して、自分自身のことを説明するための秘訣がそこにある。それはまた、自分自身について深く知ることでもあるのだ。

いま「驚き」という言葉を使ったが、これこそが「異質性との出会いの場でなければならぬ」第2の理由である。異質性との出会いは驚きを生む。だから異質性が必要なのである。

アメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソンは「sense of wonder (不思議さに驚く感性)」こそ、自ら学ぶ姿勢をつくるものであり、学びの基礎であるとしている。英語の教科書で、英語そのものの異質性、そしてテキストに含まれる異質性と出会うことによって驚き、「これは何だ?／どういうことだ?／なぜだ?」と疑問を抱くとき、生徒は自ら調べ、自ら考えるようになるのである。

昨今のグローバル化する社会においては、異質な人々ともコミュニケーションを成立させ、人間関係を構築していく必要がある。その場合も、センス・オブ・ワンダーは重要である。信念や価値観の異なる相手の主張、つまり自分にとって異質な主張を聞くと、往々にして「それは絶対に間違っている」と受け止めがちだ。だが、そういった反応から闘争は生まれても、理解や協働は生まれない。だから、異質な主張に対しても、まずは「ほう、そういう考えがあるのか!」と驚きをもって受け止め、自分が理解できないことについては「それは何か?／どういうことか?」、納得できないことについては「それはなぜか?」と質問していかなければならない。こうすることで、世界中のどこ、だれの、どのような主張に対してもコミュニケーションを成立させ、最低限の人間関係を維持することができる。これは、地球において多様な(あるいは互いに異質な)人々が共生していくうえで、必要不可欠な技能といえるだろう。

英語の教科書は、生徒にとって異質性との出会いの場でなければならぬ——自分自身について深く知るために、自ら学ぶために、そしてこれからの地球で共生していくために。

『NEW CROWN デジタルテキスト』 活用のポイントと 平成28年度版について

株式会社三省堂 デジタル教材編集室



■平成28年度『NEW CROWN 指導用
デジタルテキスト』CoNETS ビューア

活用のポイントと改訂に向けて

平成24年度版の『NEW CROWN 指導用デジタルテキスト』は、おかげさまで、全国の採用校のうち、約3割の学校で導入されています。

さまざまな機能がある中で、一番人気はやはり「フラッシュカード」です。「英語のみ」、「英語→日本語」、「日本語→英語」、「日本語のみ」の4つのモードからカードを再生できますが、先生によって、あるいは子どもたちの様子に応じて、さまざまに組み合わせて使っていただいています。平成28年度版に向け、全国の先生より、「再生中に子どもたちがうまく言えない単語があったら繰り返し再生したい」、「品詞や発音記号を表示したい」など、多くのアイデアをいただいています。

また、本文の「音声再生」もよくご利用いただいています。通常の「通し読み」や「リピート読み」、「役割読み」のほか、「シャドーイング」も人気です。音声CDのようにトラック番号を探して再生するのではなく、再生したい文をすぐに指定できるので、ポイントの文の音声再生もテンポよく行えます。

本文の音声再生についても、音声のスピードやシャドーイングなどについてご意見をいただいています。音声再生のスピードは速いものがよい場合や少し遅いものがよい場合など、同じクラスでも英文や状況によって異なるようです。

また、英文の行間に解説を書き込みたいなどのご要望もいただいていますし、映像をもっと豊富に、といったご意見もあります。いずれも前向きに対処するよう準備を進めているところです。

学習者用デジタルテキスト

既になんらかの形で子どもたちが使うタブレット端末が導入されている学校も増えてきていると聞いています。「タブレット端末に導入できるコンテンツはないか」というお問い合わせもいただきます。平成28年度版からは、これまでご提供できていなかった学習者用端末へのコンテンツを、『学習者用デジタルテキスト』として提供予定です。

『学習者用デジタルテキスト』を利用すると、端末の連携機能を使ってさまざまな活動ができるようになるだけでなく、個々での活動時間も増えることになるので、端末に目を向けさせる、前を向かせる、などの切りかえを意識することがポイントになります。たとえば繰り返し単語の練習をするとか、リスニングの練習で何度も英文を聞いてみるとか、個々人のトレーニングの時間は端末を利用し、一斉指導で確認したいときは指導者用を見ながら確認を進めていく、などの使い分けが考えられます。教科書会社12社が協同で開発しているCoNETSビューアでは、先生が子どもたちの端末を操作できないようにしたり、子どもたち同士でのやりとりができるような仕組みも持たせています。

今後は、活用場面を想定したコンテンツをご用意すると同時に、さまざまな活用方法の提案も行っていきたいと考えています。是非、先生方の実践やアイデアをお聞かせいただければと思います。